



東九州支部報



百周年記念登山大会(7月24日)(牧ノ戸峠にて)

《 もくじ 》	
平山会長の記念講演	1
百周年記念登山大会	2
ガラメキ峠から所小野山へ	4
犬が岳へ	5
北九州5周年記念集会報告	6
フンザの旅(2)	6
グリゲンツワルト・トレッキング③	7
今西錦司の話	9
私の無名山ガイドブック	22
今西錦司③	10
お知らせ	11
後記	11

平山会長の記念講演 東九州支部の記念行事として

報告 加藤英彦

日本山岳会は今年創立百周年を迎え、その記念式典が今年一〇月一五日に東京で開催される。これに先立ち、全国を八つのブロックに分けて、各ブロック単位で記念式典が開催されることになっている。九州ブロックは去る七月一六日、一七日に宮崎支部の主催で、えびの高原で開催され、初日は記念式典と祝賀会、二日目は霧島連山で記念登山大会が実施された。

これとは別に東九州支部でも百周年を記念して、独自の企画で記念講演会と記念登山大会が去る七月二三日と二四日に実施された。以下その報告である。

「南極・自然と人」

記念講演会は、平山善吉日本山岳会会長を講師に招いて、七月二三日午後一時三〇分より大分文化会館「第一小ホール」で行われた。これには支部員のみでなく、一般の参加も呼びかけたところ、八〇名を上回る聴講者でホールが満たされた。

講演会に先立ち、西事務局長より本日の司会者として加藤会員の紹介があり、司会者が冒頭に記念事業等について説明を行った。続いて梅木支部長の挨拶があり、百周年の意義ある年とそれに関連する支部の主な行事などの紹介、その一環としての本日の記念講演会などについて説明があり、記念講師の平山会長のプロフィールなどの紹介があった。

平山会長の記念講演は「南極・自然と人」と題して約一時間三〇分にわたり、会長の南極観測隊参加の体験を中心として、南極と地球と自然と人間の生活等に関する幅広い講演であった。



会長は二一歳の時に初めて南極の第一次観測隊に選ばれて以来、第二次、第三次と参加し、第三次では越冬隊にも抜擢されている。その間に残した数々の記録や資料などを、多くのスライドを使って、熱心に説明されたのである。聴く人たちもこれだけ身近に、豊富な南極の話題を、しかも丁寧な解説で耳にするのは初めてとあって、熱心にメモする姿も数多く見られた。

講演の概略は

- 一、南極とは
- 二、昭和基地の生活
- 三、私の南極
- 四、五〇年の移り変わり
- 五、観測と成果

六、南極の建築
 となっていて、平山会長は休みなしで約九〇分間を立ちっぱなし行われた。数多くの専門的な話の中で、時には樺太大ジロの話や、基地での越冬隊員の生活の様子など興味深い話題もあり、また、会長の専門分野である建築の話になると特に力を入れての説明であった。最後には質問時間もとり、会場からの質問にも快く応じられた。

記念講演のあと、今回の百周年記念事業の一つである中央分水嶺担当の飯田会員より、中央分水嶺についての簡単な解説と、六月三日に完了した当支部のこれまでの取り組み経過の報告があった。そして、九重にも中央分水嶺が通っており、明日の登



山大会は、中央分水嶺踏査完了記念も兼ねて、その一部を歩くという説明もあった。

この日、講演会に参加された人たちには受付でサインをして頂いたが、これには合計八〇名の名前が連ねられていた。

平山会長を 囲んで懇親会

講演会のあと、場所を第一ホテルの「豊後」の間へ移し、午後五時三〇分より平山会長を囲んで懇親会がもたれ、これには支部会員および会友二五名が出席した。

会長と支部員との懇親会は、会長就任の年（一昨年）と昨年、それぞれ会長が日本文理大学の夏期特別講座に來分するたびにまたれ、今回が三回目である。

開宴にあたって支部長の挨拶があり、続いて出席者の最長老である橋本祥案会員の発声による乾杯で、これには会長持参の南極の氷で割った水割が使われた。

会長の説明だと、氷の中には

約五万年前の空気が閉じこめられているという。耳を澄ますと水割りのコップの中で、氷から空気がはじけ出る時に「パチン」と小さな音がするのである。これがまた趣深いものがある。しばらく歓談のあと、出席者一人一人から近況報告など小スピーチの時間となった。それぞれが百周年の思いを語りながらそしてまた、今回わざわざお越し頂いた平山会長に対する感謝の思いを込めたコメントなどが披露された。

（懇親会・第一ホテルにて）



最後は、明日の久住山の登山大会に気持ちを残して万歳三唱のあと、午後八時半にお開きとなった。

講演会、そして懇親会と続いて、平山会長と東九州支部員と

の親密なる関係が、よりいっそう深まった一日であったといえる。



一〇〇周年記念登山大会、第四回青少年体験登山大会、中央分水嶺踏査完了記念登山大会

日本山岳会の創立一〇〇周年を記念して東九州支部が実施する登山大会が、前日の記念講演会に続いて去る七月二四日、平山会長も参加のもとで九重山系で実施された。

第四回青少年体験登山大会、中央分水嶺踏査完了記念登山大会と兼ねて行われたのもで、青少年体験登山は、将来を担う青少年に美しい自然に触れ、心身ともに健やかに成長してもらいたいと東九州支部が開いているもので、四年前に祖母山系の越敷岳・緩木岳で実施されて以来今年で四回目である。

日本山岳会創立百周年事業の一環として取り組んで中央分水嶺踏査は、東九州支部の担当する区間はガラメキ峠から熊本県境の瀬ノ本までの約百キロで、

平成一六年五月からとり組み、一七年六月五日に完了した。この完了を記念する登山大会で、一般参加者を募集しての登山は、九重を通っている中央分水嶺の一部を歩こうというものである。この日の山行報告を後藤会員にお願いした。(飯田)



平山会長を迎えて久住登山

後藤 実

午前六時半ごろから参加者が続々と大分駅前に集まり始めた。おばあちゃんの森山恵美子さんに連れられた川野岳ちゃん(五つ)陸ちゃん(小学二年)の兄弟は初参加。おばあちゃんは「登れるでしょうか」と心配顔。近所のお姉さんと参加した伊藤温子ちゃん(小学五年)は昨年も参加しており、顔なじみ。ちっちゃな体に登山靴を履き、スパッツまで付けて昨年は一身に注目を集めた田所なずなちゃん(六つ)と弟の蓮曹ちゃん(三つ)の姿が見えない。聞けば牧の戸峠までマイカーで行き、現地で合流するという。

インドの青年も参加

平山会長、梅木支部長が乗り込むと午前七時、貸し切りバスは出発した。加藤英彦会員が今日のガイド役。加藤さんから日程説明があり、参加者全員が自己紹介したが、昨夜開かれた平山善吉日本山岳会会長歓迎パーティーに出席した組はみんな二日酔い気味。橋本祥案会員(九〇歳)の矍鑠たる姿に拍手が起き、続いて立った平山会長の「橋本さんの子供です」に爆笑が起った。飯田勝之会員の「アメリカに滞在していたの娘の婿ビカス・スーズ(インド)です」に車内にどよめきが漏れ、ビカスさんが「グッドモーニング」と頭を下げると大きな拍手が起った。

バスは湯布院道の駅でトイレ休憩のあと横断道路をひた走る。途中、飯田さんから中央分水嶺の詳しい説明があり、橋本さんの自作「蓬萊山古墳に想う」の詩吟が朗々と吟じられると、一段と大きな拍手が起った。このあと雰囲気盛り上げる加藤さんお得意のハーモニカ演奏があり、一気ににぎやかな雰囲気になり、一気ににぎやかな雰囲気に包まれた。やがて車が牧の戸峠に着くと、マイカーで来た人たちが出迎えてくれた。全員がそろると、まず記念撮影。加藤さんの指導でストレッチ体操をし、星生山の分水嶺を歩く組と、ノーマルルートで久住山に登る二組に分かれた。分水嶺組は一

三歳から九〇歳まで

午前八時五〇分、まず分水嶺の組が出發、五分遅れてノーマルルート組が出發した。この組には下は三歳から上は九〇歳までいるとあって、「ゆっくり、安全に」がモットー。この日は夏休みに入って初めての日曜日に好天が重なり、福岡の小学校や中学校など数校の団体のグループや個人と非常に多い。

この日の最年少田所蓮曹ちゃん(三つ)はパパに手を引かれて展望台の上まで登ったが、力尽きてパパにだっこ。姉のなずなちゃんはおとなに伍して登っていく。おばあちゃんが登れるだろうかと心配した川野岳、陸ちゃんの兄弟も、おばあちゃんの心配をよそにすいすい。追っかけるおばあちゃんは汗だく。最年長の橋本さんには親戚に当たる会友の佐藤善則さんがつきつきりて世話をやく。沓掛山の肩に当たる展望台に着いたところで蓮曹ちゃんはパパのリュックの上の特等席ですやすや、夢の国へ。

ここで休憩したのを潮時に、これから先の道すがら、初めて久住山に登る平山会長に山群の説明をしながら登ったが、ミヤマキリシマの説明には大きな関心を示された。小休止をとりながらゆっくり登り、扇ヶ鼻分れに着くと入れ替わりに、休憩していた分水嶺組が出發した。ノーマルルート組はここでリュックを下ろして大休止。副食を食べ、栄養補給した。休憩中の人に日本山岳会の平山会長ですと紹介すると、「一緒に写真を撮らせてください」と大人気。西千里浜まで来ると、さすがの橋本さんも疲れた様子。すかさず中野稔会員が橋本さんのリュックを自分のリュックに重ねて背負った。

九〇歳で久住登山にバンザイ

白い花を咲かせ始めたノリウツギのトンネルをくぐったり、青い草むらの中にメハジキやマコナの可憐な花を見つけて歓声を上げながら、西千里の草原を進む。

分水嶺組は久住分れでノーマルルートと一緒に山頂を目指した。全員が登頂すると記念写真を撮り、西孝子さんが今西錦司博士流に、どこの山でもするように全員が三角点にストックを当てた。加藤さんの「平成一七年七月二四日、日本山岳会東九州支部の四二人が青少年

(久住山頂のバンザイ)

体験登山と中央分水嶺踏査で久住山に登ってきました。バンザイの発声に唱和、全員でストックや両手を振り上げた。その姿に居合わせた登山者は「何事ならん？」とびっくり。

石川洋祐さんが持参、佐藤秀二会員が担ぎ上げたスイカがふるまわれた。昼食が終わると一三時三〇分、下山にかかった。橋本さんを支援するのはリーダーで医師の野村会員、阿南寿範会員、中野会員、土井慶典さんは下りが足に悪いらしく、久住分れまで下ってくると大腿部がつつたと座り込んだ。エアース



ロンパスをかけて交代でもみほぐす。これを何度も繰り返して一五時四五分、先に下山した人たちの拍手に迎えられるまで自力で下山した。それにしても九〇歳で久住山を往復した橋本さんの体力、氣力にバンザイ！

最後にパスの前で梅木支部長よりあいさつがあり、バスで帰る人たちはバスへ、マイカーで来た人たちはそれぞれ帰途へとついでた。



(久住山)

九重連山(久住山)登山に参加して

橋本祥案

東九州支部主催の九重登山

に参加して、支部長の梅木さん、事務局長の西さん外、多くの岳友の方の配慮や援助を戴いて、無事登山が出来たと熱くお礼申し上げます。今年に幸い日本山岳協会長の平山先生のお供が出来たことも大変感謝しています。「九十になつたら九重」にと云われていましたが、私もぼつぼつ近くなつてきました。おかげ様で今日まで生かされてきました。若い岳友の多くの方々のパワーを戴いて感謝しています。色々病気をしていますが、近頃やっと普通人になりました。日頃氣をつけていることは

一、健康第一(早期早診)生かされていることに感謝する

二、体操(運動)をする自己流可、そして歩くこと。時々休んで深呼吸(家でも)

三、趣味を持ち続ける(上手下手は別)例(詩吟、絵手紙、版画、俳句、短歌、詩外)

九重の山路岩みら
ぼつぼつ歩く(自由律)



ガラメキ峠から所小野山へ

(三月月例山行報告)

園田暉明

五時にサニースポーツを出発したという中野号・安部号(西・長野・今山さん同乗)に大分医科大の先で拾ってもらい、庄内町経由で湯布院ICから高速へ。

天気予報は雨。今日ばかりは予報のはずれを願う。

七時、日田ICを出て直ぐのコンビニで飯田号(遠江さん同乗)と合流。本日の踏査はガラメキ峠の東方を大将陣山に向けて行ける範囲までとのこと

国道二二二号から小鹿田への道に入り、更に釜ガ瀬溪谷沿いにガラメキ峠の少し手前に到着。何時ものようにGPSを中野さんが操作、飯田さんが先頭となつて、八時一分、スタート。昨年五月に上塚山からガラメキ峠を越えた地点まで踏査し終えているので、今日はその地点から再開である。

前回の踏査では、分水嶺から外れたと判断し、そこで踏査を中止したことから、今回はその嶺は踏むまいと慎重に分水嶺を探す。しかし付近一帯は深い林の中で見通しが悪く周辺の地形

は全く不明。スギの風倒木帯やヤブを分けながらほぼ一周して最初に登り着いた尾根が分水嶺であったことが判明。

アップダウンを繰り返して、次第に高度を下げながら進むが、一帯は林業対象地域で、高いスギ・ヒノキの林で、薄暗い中の山行であることから、いつもの爽快感はない。更に、尾根の南側直下に見える舗装道路の存在が、これに拍車をかける。(皆も同じ考えであったのでは？余り会話も弾まなかった感じ。)

せめてもの救いは、傾斜の厳しいやせ尾根では、少しではあるが、生の自然を感じることできる広葉樹林が残っていたことである。木々の芽は堅く閉じたままであるが、美しい若葉となるのは間もなくであろう。

激しい杉の倒木が行く手を遮っている地点に至る。地図では直ぐその先に小さなピークがあるが、中間の樹木に遮られそこは見えない。やつと、そこを越えると確かにピークがあり、改めて地図の正確さに感心。

少し下がった鞍部(七二七m、コース中の最低点)で小休止。九時三〇分。小雨が落ち始めたのですぐにスタート。

急斜面を降りてくる人がいる。誰かと思つたら、先回りしていた安部さんと、次の合流点を打ち合わせる。斜面には尾根に沿って、数m間隔で新しい木の丸太が線状に立っている。途中で

聞いた鹿の鳴き声と、付近の小さな木の皮が剥けていることから、鹿の進入を防ぐネットの設置作業の途中と分かる。

二〇分程登るとほとんど勾配もなく、少し進むと、地図上の八四六、八m地点の釜が瀬山に到着。四等三角点があるが、見通しは樹木に遮られ、あまり良くない。



(釜ガ瀬山にて)

三角点のすぐ横の樹木の陰に山国町の町有林の境界を示すと思われる、「山国村」と刻まれた石柱がある。本年三月の合併で、山国町は中津市



に名を変えたが、この標柱は、前回の大合併（昭和二九年頃？）時に山国町が誕生した前のものらしい。

私には、その標柱が合併により消えかねない山国の地名を忘れないでくれと語りかけているように感じられた。

削れやすい表土の急斜面を降下し鞍部へ。掴まる樹木も疎らで、足を滑らせ転倒する女性も怪我なし。

再び、深いスギ林に入るが、この辺りから本格的な雨となる。雨脚が激しくなる中、前進、所々の分岐点で分水嶺となる尾根の選択に苦労することもなく、ゆっくり高度を上げる。

台地状になった地点の、雨除けとなる大きな杉倒木の下で昼食。一時三〇分。そそくさと食事を終え、直ぐに再スタート。二次林の広葉樹の斜面に取り付き少し、登ると勾配も無くなり、雑草の生えたはげ山を進む。

前方一kmほどにピーク（所小野山）が迫った地点（八七三m）で、雨脚が強いからと山行中止となる。一二時二一分。

尾根から林道へと下る途中、雨の日のデパート入り口で、傘にビニール袋をかけるように、檜にビニール袋のかけられた植林地を通る。鹿の食害は防げるかもしれないが、風の影響か、先端の葉が折れており、成長しても曲がってしまい、利用価値の低くなるのは明らか。いっそ

う植林をせずに自然林にして欲しいと願ったのは、私だけではない。あるまい。

林道に待ちかまえていた安部の車に飯田さん、中野さんが乗りスタート地点まで迎えの車を取りに出発。残された我々は雨の中、林道を下る。一五分ほど進んだ三叉路で、どちらに進むか判断に迷う。とりあえず右のコースを進むが、途中から私は迎えの車が直進のコースから来た場合困ると、引き返す。

そのうち女性軍もコースが誤りであったと引き返して来る。距離はそうないと思われるが、一時間以上経っているのに迎えの車はこない。携帯電話もダメ。迎えの車も我々を探しているのではないかと、発見を容易にするため数班に分かれて付近の要所に散らばる。

やっと迎えの車と合流。降りしきる雨の中、長く感じられた約二時間。日田林校の演習林宿舎に着き、一四時二〇分山行終了。朝の乗車区分で帰路へ。

（敷きざだからと中古のカップを着用、雨漏りがして、数年ぶりで風を引いてしまい、自業自得ではあるが、私にとって味の悪い山行でした。）

参加者：安部、飯田、今山、園田、遠江、中野、長野、西、

犬が岳へ

（ツクシシヤクナゲ）
（五月月例山行報告）

安藤セツ

五月の月例山行は今年度のテーマである「四季折々の花をたずねて」で、ツクシシヤクナゲ鑑賞登山である。五月八日午前四時三〇分、サニー集合。中野車に西、安部車、安藤車。遅れた渡部さんは「先に出発して下さい」とのこと、まだ明けきらぬ中、大分より高速にのる。宇佐のローソンで食糧を仕入れたあと、飯田さんの待つ津民に向かう。

途中、民家の石楠花はもう終わりに近い状態だ。山の花はどうだろうか。久しぶりの参加だけど登れるだろうかと不安もよぎる。

飯田車と合流、^{あまた}数多の緑が朝の光に美しく輝き、朝の冷気が心地よい。特に、椎の若葉と花を見たのは初めてで里山の美しさに感動した。

「新緑の樟よ椎よと打仰ぐ」高木晴子さんの句その通りで、上手に表現したものだと感じずる。

平成九年に来た時は改修中であった道路も、すっかり良くなっていた。相の原登山口にある石柱の鎖も今日は片寄せられて

いた。中野車、安藤車はここに駐車し、飯田車、安部車に全員分乗して林道を上る。安部車に乗った四人、「あれエー、後ろのドアが間ちよるよー」若い中野さんが走るように、落ちた荷物をとり下る。リュックと片方の靴を手に、息を切らして戻ってきた。最初のカーブで落ちたらしい。ご苦労様でした。

コンクリート舗装の急な林道を上り、舗装の切れた林道三叉路の伐木置き場に、二台を寄せて駐車。七時の出発となる。真新しい未舗装の林道を少し行くと登山口の標識がある。スギ林の中の登山道を飯田さんの先達、続いて西さん、我がグループのみいつもの光景にウグイスの声が加わり、やっぱり山はいいなあ。

藪椿、石楠花が見られるようになり、空が広がってくると笈吊峠、七時四〇分到着。半袖になる人、水を口にする人、またいつもの光景。笈吊岩では三点支持で緊張して登った。岩を登って稜線に立つと雲海の彼方に九重連山、近くは求菩提山。たどる稜線は石楠花のトンネル。

今が一番の見頃ではなかるうか。里山の緑と眺望を楽しみつつ登ると八時五三分、犬が岳一三一米山頂。東九州支部恒例の儀式は昨日七六歳の誕生日だった安藤幹が、鶯に負けぬ声を張り上げた。早々にビールを出す

人・・・、そんな時に渡部さんが到着。万歳のやり直しをした。記念撮影の後、大竿峠を経て林道経由で笈吊峠を越えて下山する西、安部、中野組と、急用のため急いで引き返す飯田さん、経路岳まで足を伸ばす渡部さん、もう一度石楠花のトンネルを通りたいと来た道を引き返す安藤組と、それぞれ別行動で下山となる。

笈吊岩で加藤パーティと出会う。気持ちよく私たちの下るのを待ってくれた方にお礼を言い、鶯と相思鳥の声を楽しみながら、変な時間の弁当を開く。

毎年登る人の話ではここ数年で今年が一番石楠花が美しいと大きく。笈吊峠では九電募集の集団に会おうが、それより先は静かな山道で、タカトウダイに足



（犬が岳にて）

を止めたり、せせらぎに手を入れたりやっぱり山はいいなあーを実感した。次も頑張るぞー。皆様お世話になりました。(五月一日)

の孤島時代から高速道路が出来、ビッグアイ効果であろうか、県外のナンバープレートが盆正月以外でも頻繁に見かけられる様になった。北九州新空港が完成すれば、県北の雰囲気も北九州の衛星都市の仲間入りと成るのでは。



北九州支部五周年記念集会参加報告

中野 稔

今年は何周年の影響で沢山の大会が、昨年の台風のように吹き荒れています。台風の被害で林道が寸断されたお蔭で、今までそれ程脚光を浴びていなかった登山道が整備されていると噂に聞いています。別ルートから登山すると初登頂の気分になれるのは楽しいものです。

英彦号に便乗して大分を午前9時半に英彦山へハンドルを切る。初夏の爽快な風に乗って車は順調に匠大バイパスから国道二一〇号線へと走る。長閑な庄内から観光地湯布院の脇をすり抜け中央分水嶺である水分峠峠を踏みしめた。水分峠から霧困気が少しずつ変わって行く、陸

玖珠盆地をタイヤが転がる頃には時計は十一時を回っていた。旅なれた英彦号は旧道から県道四十三号線に乗る。この県道は中央分水嶺踏査調査で幾度もお世話になった街道です。中央分水嶺上の池ノ尾の集落を駆け抜け、立羽田の景を横目に道の駅山国の正面に出た時は十一時五十分で、沢山の観光客と共に人間にエネルギーを充填する。

四本のタイヤは国道二百二十二号線を日田方面へ約二キロ走って、国道五百号線を野峠へ向かって転がる。尽きせぬ思い出話に花が咲く頃豊前坊の近くの森の家にタイヤは音も無く止まった。受付に居る数名の会員達と友情を確認すると、虚空の間と大河辺野の間へ荷物を運ぶ。虚空の間には旧知の日向さんと安部副幹事に似た江頭さんと四人で、関西支部からの中谷さんは西さんと相部屋でした。

平山会長の出迎えに十数名の会員が玄関へと向かう中、夢路を三十分ぐらい散策して会場には五分前に入室。北九州の会員の紹介では平山会長は日本の南極観測のパイオニアであり、建

築学会のリーダーの一人として日本の戦後再建を支えてきた様に私には聞こえました。

南極は、この惑星の歴史と神秘を未だに平均二千五百メートルの氷のペールの下に隠し、人類に大切な何かを語り続けているように思います。南極も他の大陸と同様に天然資源を豊富に蓄え、大昔この大陸にも様々な動植物が生存していたとの事。講演は南極観測の歴史と今後の課題が中心でした。

懇親会には会議の為一時間遅れで八十歳を過ぎた添田町の町長が来まして、英彦山観光開発の必要性と、添田町の古里の山として後世に残して行く決意を熱く若々しく語りました。

夜七時からの前夜祭では、山伏達が怪しい山伏問答を繰り広げ学生達の嘲笑買い、山伏ダンスでは喝采を受けました。次に地元の青年団が力強く太鼓を豪快に打ち回し、一匹の大蛇がスネイクダンスを踊り、婦人会の奇麗どころは優雅にしとやかに舞を披露しました。北九州の会員の優しい心使いは、最後まで絶える事無く太鼓の音のように今でも響いておられます。ここに感謝の辞を行間に残したいと思えます。

分出発、中岳に九時三十五分着、南岳九時五十六分、北岳、高住神社十三時十一分(豊前坊)着でした。奉幣殿まで平山会長は、何処かで痛めた足を引き摺りがちに階段を上り詰め、お別れの写真を西さん達を皮切りに、三三五五と写真の中央に笑顔で納まり続けていましたが、夏には必ず久住山頂で写真に収まることを約束したとの事です。十一時からの中岳での山開き神事には四百名ぐらいの人が集まり、眠気を誘うお経に耐え偲ぶ事十五分で念願のタオルをゲット。宮崎支部の十人は仲良く帰りの都合で先陣を切って下山して行きました。熊本支部の酒豪中根さんは、唐辛子の妖精のように日を置かず千二百メートル級の山を駆け巡っているとの事で、七月の宮崎大会では誰かが彼の山との武勇伝を聞く事に成ると思えます。北九州支部のジャンニーズ系の青年和田秀明さんは、メンバー表には載ってないものの何故か親しく語り合いました。英彦山は初めてと言うものの久住や由布山には幾度も登っているとの事。いつしか英彦山との出会いに想いが駆け巡り若かりし頃を思い出した。西さんは、五十年前と五年前に登ったとの事、なんと私が生まれ変わった頃ではないか。昨夜の宴会の途中で西さんは参加者全員と親しく握手をして

周り、豊前坊ではお別れと感謝とお礼の握手をそこに居た全員としていました。この精神には、背筋を伸ばして一礼を捧げるに値すると思う。

登山は殆どの人にとつては、生業ではなく心の糧であり精神のエネルギー補給で、沢山有る芸術や趣味、スポーツの如く自分自身を表現する一手段だと思えます。

(西、加藤、中野)



フィンザの旅

(その2)

梅木秀徳

何でそんな苦勞をしてまでフィンザに入ったのか。帰国して、何人かにそう聞かれた。そのような人には、山に登るのでさえ疑問を感じ、「何で山に登るのか」と問う人種もある。ただ、同行した「歴史と自然を学ぶ会」の会員はみんな、フィンザに感動を覚えたという。百聞は一見にしかずという点はあるけれども、少なくともフィンザを取り巻く自然と、そこにある文化は人々を魅了するのだ。

私人にとつては、フンザは憧れの地だった。これまで半世紀を超す登山の中で、グレート・ヒマラヤをめぐるかなりの土地を歩いたつもりである。ネパール、中国、カザフスタン、ウズベキスタン、インドなど。やまでもヒマラヤをはじめ、ヒンドウクシユ、天山、祁連、雲南などの山も一部は知っている。ただ、パキスタンは四〇年前に訪れてはいるものの、カラコルムは未知の地だった。

それとともに、インドス川上流地帯はインド亜大陸とユーラシア大陸が激しくぶつかり、地球上でも最も劇的な造山運動の行われている地域でもある。その

うした「壮絶な現場」を実際に自分の眼で確かめたいという願ひもあった。

ギルギットの少し南で、インドス川ギルギット川が合流する地点がある。そこに「三大山脈交点」の展望台がある。つまり、インドス川左岸がヒマラヤ山脈、同川とギルギット川の間がカラコルム山脈、インドス川右岸とギルギット川右岸がヒンドウクシユ山脈というわけである。確かに一点というわけではない。そして、その地帯は三大山脈が接し交わる地域であることは間違いない。

もちろん、三大山脈あけではフンザとそれを取り巻く地帯からは、ほかに東



(フンザの山)

には崑崙山脈、アルチン山脈など、北にはパミール高原、天山山脈、西にはヒンドウラージ山脈、スレイマン山脈、スレイン山脈などが出ており、まさにグレート・ヒマラヤの核心部とも言える地域なのである。山好きな人間なら、生涯に一度は身を置きたい土地柄だ。

残念ながら、先に述べたように山々を十分望見するわけにはいかなかった。だが、二大陸の「壮絶な衝突の現場」であることは理解できた。それは、カ

ラコルム・ハイウエー一帯の地形、地質が明確に示してくれた。たとえば壮大な標高差とか、他の地域とは異なる生け花の剣山のような針峰群、加えて崩れやすい、いかにも生まれたてのような急峻な斜面とかが、造山の現場そのものであることを教えてくれるような気がした。

それとともに、そこは壮大な山地を縫って走るシルクロードの地でもあった。モノが行き交い、三蔵法師のような求法の僧が通り、ココロ・文化の通い路でもあった。今も、随所に往時の道の跡が伝えられ、人々の生活の中に痕跡を残している。

「自然と歴史」を求める者たちにとつては、垂涎の地であることも確かであろう。

しかし、「桃源郷」と呼ばれる自然とともに生きる自給自足の生活で、長寿の国とされたフンザに、今大きな変化が起こっている。商品経済の流入、都会生活文化の浸透、信仰生活での紛争など。それをもたらしたのは、ほかならぬハイウエーの開通である。フンザは、これからも変わっていくだろう。出来ればもう一度は訪れたい。(終わり)



グリーンデルワルト トトレツキング

(その3)
八重康夫

九月二〇日

なかなか眠れず、朝三時ごろに目が覚めて、また、日本の友人達にメールを打った。

列車の出発時刻は七時四四分。ホテルでの朝食は六時半からだったので間に合うと思っただけ。すっかり準備して、食べ終わった部屋に戻ることもなく出発できるように、チェックアウトも食事前に済ませた。食事はバイキング形式だから早く済ませられた。

食事の時に気づいたのだが、給仕の男性がガムをクチャクチャ噛みながら、食べ物を運んでいるのには驚いた。日本では考えられないことだ。こちらではこれが普通なのだろうか？

さて、六時五〇分にはホテルの隣のパリ・リヨン駅にきた。しかし、改札の仕方がわからない。切符をどこに見せて良いのか、うろろするだけだった。結局わからず、もう一度ホテルに戻って聞こうとするがわからない、英語も拙いためなかなか通じない。

そうしているうち、別の団体の現地案内日本人がいたので聞くと、改札はないのだから、た

だ機械に切符を差込むだけで良いと言う。駅に戻ると、その機械がどこにあるかわからない。いろいろ探し回っていると、窓口らしきものがあって、そこで聞くと、「インターナショナルの窓口だ」というので、その人の指す方向の窓口に行くと、その人が、「機械に切符を差し込むだけで良い、あちらへ行きなさい」というだけである。も

じもじしている、「早く行け、あなたに教えることはそれだけだ」と繰り返すのである。

私の後ろには誰も待つていない。機械はたくさん並んでいるが、自分の切符が入るような機械は無い。これらはカードで切符を買う機械だけのようである。それなら一〇台以上ずらっと並んでいる。この大きな機械のどこかに切符を差し込めるところがあるのかと捜してみても、入りそうに無い。もし無理に入

れて出てこなくなったらどうしようかと恐い。そうこうしているうち、私と同じような細長い紙製の切符を持った婦人が隅っこの郵便ポストのような機械に、それを指しこんでいるのを見つけた。これだと思ひ、聞いてみると、多分そうでしょう。どの方向かでさしこんで御覧なさいとやさしく英語で教えてくれた。何回かやると無事刻印され受け付けが済んだことがわかった。

さあ、では乗り場はどこだろう。七時四四分の出発時間まで

あと一五分と迫ってきた。そのうち、メインのホーム列とは違う並びのホームが乗り場だということがわかった。やっと間に合った。それでも心配になり、これはローザンヌ行きかと列車の中で尋ねると、YESと返ってきたので安心した。

仏の新幹線であるTGVは車内の冷房が暑過ぎず寒過ぎず、丁度良かった。しかし、駅構内の係員達はみな冷たく感じた。旅行者に聞いたほうが丁寧に教えてくれた。TGVはそれほど早いとは感じない。動く景色がのぞみより遅いと思うのは気のせいか？

窓の外には牧草地がずっと続く。牛は白に茶色の斑のついた、昔の牛缶についていた絵とそっくりであった。今、日本ではこの色の牛はほとんど見かけない気がする。

列車はフランス国境を抜け、ここでパスポートを調べられた。欧州では、駅での改札や出入り口はなく、切符はすべて途中の車内で車掌さんが調べるのがわかった。

一一時三七分、約四時間TGVに乗って、ローザンヌに着いた。ここではモントルー行きの普通列車に乗り換えるが、時間が二〇分しかない。駅の時刻板でホームを捜し、速やかに移動して、列車に乗り込んだ。それでも内心はひやひやものだった。乗り換えが一番気を使う。

スイスに入ると、今までほとんどフランス語だけの案内が、ドイツ語、英語、フランス語と三つでやってくれるようになり、だいぶわかりやすくなった。モントルーに着くと、これから乗るパノラマ特急と同じものがあった。しかしそれは一列車前のやつで、ホームにいた車掌さんに切符を見せて早めに乗られないかと言うと、「You can't get on this train」とつれない返事。しかし何故か英語のやり取りがスムーズになったような気がして不思議に思われた。

さて予定通りとなると、ここで二時間の待ち時間がある。駅にあつた両替所でユーロをスイスフランに替えた。外に出て少しの時間で行ける所を聞くと、ション城が良いと言うので、タクシーで向かった。ション城では出身国を聞かれた。国によって入場料が違うのは納得いかなかったが、八ユーロ、言われるままに支払った。

返りはタクシーが拾えず、バスに乗ったらモントルー駅とだいぶ離れたところが最寄の停留所。降りた後、随分階段を登らねばならなかった。この時も助けて教えてくれたのはバスの乗客だった。

二時間も残り少なくなっていたので少しあせった。ホームに上がって待っている程なくパノラマ特急が入ってきた。特に指定席はなく、どこに座っても

良い状態だった。横と上がガラス張り、名前の通りの列車であつた。天気も良く、景色もきれいだつたが、三時間もの間、ほぼ同じような景色が続く、やや飽きる感じがしたのは自分だけなのだろうか。途中ちようど中間くらいのツバイジンメンで乗り換えがあるのだが、あせつてだいぶ手前で降りようとして乗客達に笑われてしまった。しかしそのあとそこがそうだよとやさしく教えてくれた。

やつとインターラーケンオスト駅に着いた。日本で予定表を見たとき、名前の後に^{0.5}がついているのは何でだろうと思つていたが、手前にインターラーケン^{0.5}駅があり、そうだからこれは東インターラーケンということだとわかった。忘れていたがそういういえば、ドイツ語で東は^{0.5}eastだつた。乗換えがスムーズに出来るようになり、ここでは予定の時間より三〇分早い普通列車に乗りこむことが出来た。

というところで、午後六時にあこがれのグリンデルワルトに着いた。まだギンギンに明るい。ホテルに行きつく前に店がいろいろ並んでいる。ここで、果物など、明日の行動食の不足分を仕入れた。明日はどのコースにするかまだ迷っている。

ホテルに着いてから、天気はまあ良さそうなので、一番長いコース（歩行七・五時間）を行こうと決めた。もし悪かったら

途中で引き返せば良いのだと自分に言い聞かせた。すると水分が足りないかもと思ひ、もう一度外に出たが、既に七時を過ぎしており、さつき開いていた店ももう閉まつていた。仕方なく夕食をする店に入って夕食を取つたが、日本人がどこもいっぱい居た。チーズ・牛乳などの酪製品がおいしい。さすが本場だと思つた。量が多いと聞いていたので、ハーフサイズを頼んだが、これでもまだ自分には多いくらいであつた。

水分は自動販売機があつたのでこれで^{0.5}のミネラル水を買ひ安心した。ホテルに帰ろうとした時、夕焼けに染まる山がとてもきれいだつたので、よし、日が暮れる前に写真に撮らうと意気込んで、走って帰つた。

部屋に入ると、ベッドメーカーングしていた。ところがザックの横袋のケースに入れていたカメラが無い。てつきりやられたと舞いあがり、これが無くなると思つた。旅行の思い出が台無しになる。そう思うと我を忘れてフロントに向かった。「カメラを盗まれた、どうしてくれる」と叫んだ。興奮すると英語なんか出てこない。とにかく怒っていることはわかるらしく、従業員が自分の部屋にやつてきた。ここに入れていたカメラが無くなっていると説明した。しかし「あり得ない。鍵を誰も持っていない」という。「私があ

なたに案内してもらつてこの部屋に入った時はまだベッドメーカーングしていなかったではないか。帰ってきたらベッドメーカーングしてあつてカメラが無くなっている。これはどうしてだ」と片言の英語で文句を言つた。しかしあり得ないと繰り返すだけだつた。ところが二人で部屋のなかを探して、トイレをのぞいたとき、そこに何と私のカメラがあつた。

従業員から、ちゃんとあるじゃないか、「イツツ ユア ミステイク」と言われてしまった。そういえば、部屋に入った後、どんな部屋か記録するために部屋の中を撮つて回つたことを思い出した。バストイレを写すだんになつて、もおしたため、カメラをその棚において、ケースに仕舞うのを忘れていただけだつた。

夕焼けの景色は撮れなかつたがカメラがあつて良かった。これが無いと明日のトレッキングは本当に残念だろうから。とホツトした。と同時に随分恥ずかしくなり、次の日、謝らうとしたが、その人は休みなのかもういなかった。明日の準備をしっかりとして、一〇時頃に眠りにつ

(続く)



今西錦司の話

安部可人

この冬、サニー店の西さんから今西錦司全集(全十巻)を借りた。今西の進化論。サル等は単独生活能力があつてこそ群れをつくれるという。登山で言えば私など遅れ気味に歩くから、あと一、二年で月例山行で登山の資格資格がなくなるというとか。

今西はサルは一頭、交尾とはいわずに性交という。ワイズマン修道院の院長、メンデル、シヨウジョウバエの実験のモーガン、それぞれの学説は難しく、興味ぶかい。先週テレビで観たダーウインの映画が、その理解の助けとなった。

巻末は私の履歴書、これは面白い。よき友をえて、すばらしい人生をおくった人だ。

西陣の錦屋の長男、それが錦司。幼少から昆虫に興味。ぜいじゃくな体質。京都一中の遠足安たご山、頂上一等。自信。放任登山指導。自由主義の校長。三角点を見つけたことよって頂上に達した証拠とした。以来バンザイ三唱はくせになつてい。それは身体から俗気を出すためであるという。(東九州支部では西さんが、この頂上の儀

式を今も引き継いでいる)

上高地のガイドから三升さんと呼ばれていたという。西堀(栄三郎)が介抱役。安心して飲めた。道のあるところだけ登るのが登山ではない。道をまらげえたら引き返す。

学説も同じ、自由さが大切。彼の三つの柱。

「カゲロウの棲みわけ」の発見とヒマラヤへの夢。

不幸な戦時中であつて、よき友と色々精力的に生きた人だ。内蒙古では毎晩きつい地酒パイカを飲んだ。当地には帝国陸軍の諜報関係の学校があり、その卒業生、西川一三が残した「秘

境西域八年の潜行」ドイツのナングパルバット登山隊がインドで抑留される。ハラーとほか一人が脱走。ラサでラマに優遇される。後に彼は「チベットの七年」を出版。今西はこの二冊に感激したという。その映画も観たい。会ったこともない今西錦司と感激を共にすべく、私も何とかこの二冊を読んでみたい。

(この原稿は四月に安部さんから頂いていたものです。)



私の無名山ガイドブック22

飯田勝之

無名の

ピークは

昨年に八面山のそばの足嶽に登った時のことである。山頂から、北の豪快な八面山の絶壁をバックに南側を見ると、左手に鹿嵐山、右手の木ノ子岳のピークを置いて、四〇〇m前後の耶馬溪の山並みが遠く広く連なる中に、すぐ向こうに少しだけ頭を出したピークが目についた。地図を見るとどうやらそれは五七三・七mの三角点のある山のようにだが、地図には名前がない。

私はその時、このピークにまた食指を動かされた。ヤブ山を一人で登る時、たびたび起きる私の癖である。次の機会にあれに登ってみよう・・・。

三月のある日、のどかな陽気に誘われてぶらりと県北のヤブ山歩きを思いついた。この日めざしたのはまず宇佐市麻生の入り口にある稲積山だ。この山は南半分はコンクリート材料の原石山として、すっぽりと削り取られて見るも哀れであるが、北側の宇佐平野の方から眺めると完全な姿をとどめて、その名の通り、稲の小積み形のもの

である。

山の北麓にある妙楽寺の横から田圃道を進み、一〇〇mほどで、森に入る道と二手に分かれる所がある。そこに車を置いてスギの植林地に踏み込んだ。

あとは急斜面をひたすら直登である。もちろん道はなく、目印とてないが、単純な地形であり、絶えずトラックや自動車の行き交う音、二ワトリやイヌの鳴き声が聞こえて、里は常にま近かである。スギの植林地が終り、岩の多い急斜面を登り越すと猛烈なウラジロのブッシュで泳ぐようにかき分けて登る。



(稲積山から見下す)

高度差三五〇mほどだが登りごたえがある。一時間半ほど登ると見事な天然林となり、傾斜も少し緩くなり快適な気分となる。そして、登り始めて約二時間間で山頂に着いた。三角点もな

ければ何の標識もない山頂には小さな石の祠があるだけ。南は削り取られた断崖絶壁になつていて、下の方に採石場が広がっている。崖の上から麻生方面や鬼落山、鹿嵐山などの展望が手に取るようであるが、北側は樹林に覆われて何も見えない。

下山のあとはかの山を目ざした。桜峠から本耶馬溪に入り、地図を頼りに床並から羽馬札に抜ける林道を入ってみた。そして標高三〇〇mまで上ると峠とピークから北に連なる稜線にとりついた。スギの植林地で間伐のあと朽ちた倒木などを越えながら登っていく。二〇分ほどの登りで天然林となり、やがて小さなピークに着いた。ブッシュの中に真新しい四等三角点があ



(日吉権現とバックの八面山)



(奥畑山の地図)

る。その先、高度差数メートルほど下ると短い小さなやせ尾根で、右手に羽馬札の民家や羅漢寺方面が見える。再び登りとなり、カシヤタブ、カエデなどのすばらしい天然林だが、かなりの急登で地面も滑りやすく、雨天の時などはとても手こずりそうである。シイの木が目立つようになると大きな岩が現れて、四等三角点から一五、六分で巨大な岩稜の上に出た。八面山方面の展望がすばらしいこのピークには石の祠があり、「日吉大権現」と彫られている。地図を見ると頂上は前方に二つあるピークの右手奥のようだが、まだかなりある。少し下った後小さな岩稜を二つ三つと登り越しながらの、楽しい稜線歩

きである。祠から十二、三分で小さなピークに達する。赤松や落葉樹の多い明るい鈍頂で、木々の間から少し右手(南方)にそこより少し高い感じの頂上が見える。赤松の倒木やキイチゴなどのうるさいブツ

シュを分けながら、いったん下って平らな稜線をいくと、幾分高い落葉木立の下で、歩きやすい登りとなり、ほどなく木立の中の小さな頂上に到着する。中央の三等三角点のほかに小さな標識があり「奥畑山」と書かれている。そういう名前がつけられていたのだ。

参考 コースタイム

- 妙楽寺〜〇〇五〜三叉路
- 〇〇五〜〇〇〇〜岩場
- 〇〇二〇〜ウラジロ帯
- 〇〇四〇〜稲積山
- 〇〇〇〇〜妙楽寺
- 峠
- 〇二五〜四等三角点
- 〇一五〜手前のピーク
- 〇〇一〇〜奥畑山
- 〇〇〇〜峠

今西錦司

③

西 孝子

「原稿出来た？」と言われねば始めない。生活態度は生まれ変わっても同じだろう。

資料箱を開けると、時間も忘れ



れて読みかえす。今回は「サイン」に決定。著書にサインを頂くのに、山頂でなければ頂けないと聞いている。何度かその場に出くわしたことがある。「今日は先生にサインを頂こうと思って、本を持ってきた」と話している声が聞こえる。家を出発する時、いや、本を求めた時からどこの山のどと思いつめ、当日を待ったのだろ。う。何時言い出すかと気にして、「お願いしませう」の声を聴き、私までが安心して安んずる。そう

だ、都井岬の清水旅館で昼

食の時、宮崎支部の故大谷優氏「西さん、お願いして」と見れば20冊ほどある。先生が黙々と筆を運ばれている姿が思い出される。ルール違反である。

私は一度もお願いしたことがない。なぜなら、いただいた手紙が多いから。サインといえば速達の封筒である。朱書きは普通であるが、自宅の机上での様子、手の動きを知りたいと思われる。まず赤鉛筆を持ち、上部の右と左にほどよい長方形をぬり、中央に「そくたつ」と平仮名で書く。次に左下に大きい字で「速達」と特有名崩し字で別記してある。

お元気な頃のものとは全く同じである。資料箱の中にはこの速達が多く、いただいた頃は何も考えずに読んでいたものが、今になり「なぜ」と考えをまとめてみたい。今回もまた、飯田さんにお願いで写真で皆さんにお見せします。



お知らせ

八月月例山行のご案内

・月 日：八月二一・二二日
(日・月)

・目的地：百々山(どうどうやま) (広島県)
ネムノキの山旅
サブテーマ：百周年
にちなんだ名前の山
旅山)

・出 発：八月二一日(日)
午前五時サニー発
※テント、シュラフ、四食分の食糧持参のこと。

※ 翌日二二日(月)は広島県の最高峰恐羅漢山(一三四六m)に登る予定です。

ご案内

・出 発：一〇月二九日午前五時サニー出発

※テント、シュラフ、四食分の食糧持参のこと。

※ 翌日三〇(日)は宮崎県の南部の「宮崎百山」に登る予定です。

ススキの山旅

※ 月例山行の実施日が定期総会の資料と違っていろいろありますが、ご注意ください。

事務局よりお願い

一、百周年記念祝賀会について
本部よりご案内が来ると思いますが、**日本山岳会創立百周年記念祝賀会**が次のような日程で開催されます。今年も年次晩餐会がありませので、この祝賀会には多くの会員のご参加をお願いいたします。(別途参加申し込み等の案内が来ます)

・日時：一〇月一五日(金)
・場所：高輪プリンスホテル

八月月例山行のご案内

・月 日：一〇月二九・三〇日
(土・日)

・目的地：百々山(宮崎県)

ご案内

二、**新入会員の募集**について
知人で山登りが好きな方を会員・会友にお誘い下さい。新規加入会員は四〇歳以下を原則としています。しかし、会友の方で一定の経験を経た

方については年齢を過ぎていても加入できることとしますので加入して下さい。
(新規加入会友は年齢・キャリアを問いません)

三、「大分百山(改訂版)」の販売促進について

在庫がまだ大分あります。会員、会友が知人等を買って頂く場合には、会員としての特別価格でお渡しできますので、事務局へお知らせ下さい。

四、月例山行の参加は三日前までにご連絡下さい。

橋本祥案さんの卒寿のお祝い登山会のご案内

橋本祥案会員(会員番号四三七五)が今年九〇歳を迎えられました。今なお元気に山歩きを楽しんでおられる同会員の卒寿を、会員ごぞつて久住山頂でお祝いしようということになりました。
多数のご参加をお待ちしています

・日時：一〇月二日(日)
・場所：久住山(牧ノ戸峠から山頂往復のコース)

・当日午前六時三〇分サニー発とし、現地集合組は牧ノ戸峠八時集合とします。
・参加者は集合場所等について、九月二〇日までに事務局へお知らせ下さい。(電話、FAX、はがき可)

後記

○ 我が家の軒下に一鉢だけ、月下美人があります。三十年近く前のある方から、刺し穂しなさいと葉の端をもらったものです。

○ 七月の連日のうだるような猛暑の中で、十八個の花のつぼみがつきました。そして、十八日に七個、十九日に六個一日おいて二日に五個と続けて、それぞれの夜の間にだけ開きました。

○ 満月の夜に二時間だけだけ開くという伝説のないわれのあるの花ですが、ちなみに満月(旧暦六月一五日)は二〇日でした。

○ 日に日に膨らんでいったつぼみは、その日の夕方には淡い赤みを帯びて大きく膨らんで暗くなるのを待ちます。
○ そして、午後八時頃に開き始めて十時頃には白い大きな花びらがいっぱい開きます。翌朝見る、としぼんで垂れ下がった花の姿がありません。

サボテン科クジャクサボテン属のこの花の僅か一夜だけの競演を見ていると、不思議な命の営みを感じます。
○ 皆さんの夏山計画はいかがですか?次号には楽しい夏山報告をお待ちしています。
(K・I)



日本山岳会東九州支部報 第30号

2005年(平成17年)7月25日(水)

発行者 梅木秀徳
編集者 飯田勝之
発行所 〒870-0021
大分市府内町1-3-16
サニースポーツ内 西孝子方
TEL・FAX 097-532-0926
題字 佐藤正八